

唐・吐蕃会盟の歴史的背景とその意義

——安史の乱以前の二度の会盟を中心に——

菅沼 愛語

はじめに

ラサに現存する唐蕃会盟碑は、唐と吐蕃の間に結ばれた和平条約である長慶会盟(821年)を刻んだ碑文として有名であるが、それ以前にも唐と吐蕃は会盟を行っており、漢文史料で確認できるだけでも10回ほど会盟を行っている(表1参照)。唐は突厥と2回(624年と626年)、ウイグルと1回(765年)、南詔と1回(794年)各々会盟している⁽¹⁾が、会盟を行った回数を比較しただけでも吐蕃との外交交渉を重要視していた事が推測できる。また国境劃定も吐蕃との間でのみ行われており、唐にとって吐蕃との外交交渉は特別であったと考えられる。

本稿では安史の乱(755～763年)より前に唐・吐蕃間で行われた2つの会盟として、「神龍会盟」(706年)と「開元会盟」(730～733年頃)を取り上げる。神龍会盟と開元会盟は史料的な制約もあって、これまであまり取り上げられる事がなかったが、安史の乱以前まだ唐が強盛を誇っていた時期に吐蕃との間で2度も会盟を行った点は注目に値する。本稿では主としてこの両会盟に焦点をあてて、唐・吐蕃会盟の歴史的背景と意義について論考する。また会盟の呼称を年号で区別するが、標準的な表記があるもの(平涼偽盟等)はこれに従う。唐と吐蕃の10回ほどの会盟については、表1にまとめたので適宜参照して頂きたい。

尚、本稿では主として漢文史料に基づいて考察するが、その際基本的な史料に加え、玄宗と徳宗の勅書等の史料も用いて調べ上げ、かつ唐の北方情勢も考慮し大域的な視点で論じていく。また本文中の引用史料の下線や句読点は筆者が加筆した。年代については太陰暦で記述する。

1 神龍会盟とその前後の唐・吐蕃関係

706年に行われた神龍会盟は唐・吐蕃間で結ばれた最初の会盟であるが、この時期の唐は何故、吐蕃と会盟したのかを意識しつつ神龍会盟前後の唐・吐蕃を取り巻く国際情勢も取り上げ、唐にとっての吐蕃の位置づけ、吐蕃の歴史的意義等について考察したいと思う。

1.1 神龍会盟に至る唐・吐蕃と両国を取り巻く国際情勢(北方との関連性)

まず前史として7世紀の唐の対外政策、唐と吐蕃の関係を簡単に見ておく。7世紀前半の唐は、630年東突厥を討滅したのを皮切りに、657年に西突厥、660年に百濟、668年に高句麗を次々と攻め滅ぼし、無制限とも言える対外膨張を遂げていた。しかし唐が668年までの高句

——唐・吐蕃会盟の歴史的背景とその意義——

【表1】10回の唐・吐蕃会盟（偽会盟と中止した2回の会盟を含む）

会盟	時期	会盟の経緯	盟約の内容	史料および先行研究
①神龍会盟	神龍2年 (706) 中宗	唐の宰相ら10名（又は22名）と吐蕃の大臣が会盟に署名	詳細は不明	『新唐書』216吐蕃伝； 『冊府元龜』981外臣部盟誓（開元2年5月、開元6年11月）
②会盟の為の交渉（中止）	開元2年 (714) 玄宗	河源で国境劃定し会盟する予定だったが、吐蕃軍の臨洮侵攻により中止	盟約内容の1つは、河源を国境となす事であった	『新唐書』吐蕃伝； 『資治通鑑』211
③開元会盟	開元18～21 (730～733) 玄宗	会盟し、盟文を刻んだ碑文を国境の赤嶺に立石	国境劃定、国境侵犯の禁止など	『旧唐書』『新唐書』吐蕃伝； 『冊府元龜』979外臣部和親2等
④宝応会盟	宝応元年 (762) 正月 肅宗	長安の鴻臚寺で会盟、吐蕃の礼に則って盟約	不明	『旧唐書』196吐蕃伝；『冊府元龜』981外臣部盟誓・肅宗元年；佐藤(1959, 523-526)
⑤永泰会盟（中止）	永泰元年 (765) 3月 代宗	代宗は宰相達に詔し興唐寺で吐蕃と会盟するよう命じたが、会盟は中止	なし	『旧唐書』『新唐書』吐蕃伝； 『冊府元龜』981外臣部盟誓・永泰元年3月；佐藤(1959, 551)
⑥大暦会盟	大暦2年 (767) 4月 代宗	長安の興唐寺で会盟	不明	『冊府元龜』981外臣部盟誓・大暦2年4月；『資治通鑑』224
⑦建中会盟	建中4年 (783) 德宗	正月 清水で会盟、7月 長安で再度会盟	国境劃定、緩衝地帯での兵力増強・城塞建設・田地耕作の禁止等	『新唐書』吐蕃伝；『冊府元龜』981外臣部盟誓・建中4年正月
⑧奉天盟書	建中4年10月～興元元年 (784) 正月 德宗	朱泚の乱を避けて奉天に逃亡中だった德宗は、長安奪回を条件に吐蕃と盟約を交わす	吐蕃が長安を奪回する事。唐は吐蕃へ報酬として四鎮・北庭を割譲し毎年絹1万段を与える事	『陸宣公奏議』 卷10「賜吐蕃將書」 卷16「興元賀吐蕃尚結贊抽軍回帰状」
⑨平涼偽盟	貞元3年 (787) 德宗	吐蕃の謀略により会盟に集まった唐の使者60数名が捕縛された	なし	『旧唐書』『新唐書』吐蕃伝； 『冊府元龜』981盟誓・貞元3年
⑩長慶会盟	長慶元～3年 (821～823) 穆宗	長慶元(821)長安で会盟、長慶2(822)ラサで会盟、長慶3(823)碑文を建てる	国境劃定、国境侵犯の禁止など	『旧唐書』『新唐書』吐蕃伝； 『冊府元龜』981盟誓・長慶元年

麗討滅戦に専念している間に、西方では吐蕃が積極的に西域に侵攻してきた。東西交易路の要である西域の掌握は唐にとって非常に重要であった為、7世紀後半、唐と吐蕃はその覇権を巡って攻防戦を繰り返したが、この時の唐軍の4度の大敗が東部ユーラシア諸国（新羅・突厥・渤海等）の自立活動の契機にもなったと思われる（菅沼2009）。8世紀に入ると近隣諸国への唐の対応策は少しずつ変化し、武力を行使するだけでなく外交も巧みに活用するようになる。

その際の唐の外交の中心的存在となったのが吐蕃であった。唐と吐蕃は、当初は黄河を境となし、730～733年頃の開元会盟では青海東南の赤嶺を国境となした。7世紀には武力をもって対外拡張を推し進めていた唐が、8世紀に入って境界を定めて制限を設けた点、そして唐が自分以外の国家を対等に近い待遇で扱った点は、唐にとっては初めての事であり、画期的な出来事であったと言える。安史の乱以降の吐蕃は一時的に長安を占領し、河西・隴右を占拠して唐を圧迫した事についてはよく知られているが、安史の乱以前から既に吐蕃は唐の対外政策を変換させ、東部ユーラシア諸国に対しても大きな影響を与えていたのである。

7世紀末から8世紀前半にかけて吐蕃とともに唐にとって脅威であったのは、モンゴリアの

突厥（第二可汗国）であった。『資治通鑑』巻206神功元年閏10月の記事によれば、唐は697年（神功元年）吐蕃と突厥を二虜・二賊と称し、この二国を二大難敵と認識していた。突厥は630年唐によって一旦滅ぼされ、約50年間唐の羈縻支配のもとに服したが、第2次唐・吐蕃戦争での唐軍の敗北も契機となり、679年突厥の遺民は叛旗を翻し、682年再興を果たした。再興後の突厥は、北東アジアの契丹や渤海を勢力圏に組み込んで唐を圧迫した。701年にこの唐の2大難敵である吐蕃と突厥が連繫して涼州を挟撃した（『文苑英華』巻972「兵部尚書代国公贈少保郭公行状」）為に唐は衝撃を受け、両者の連繫を警戒して、710年最初の節度使である河西節度使を涼州に創設し、吐蕃と突厥の連繫阻止を図った（『資治通鑑』巻215天寶元年）。

1.2 神龍会盟—会盟の内容および歴史背景

神龍会盟を記した直接的な史料はなく、会盟の詳細も不明である。しかし玄宗の代である開元2年（714年）と開元6年（718年）に唐・吐蕃が和睦交渉を行った際、両国は神龍会盟について言及しており、以下の3点が分かっている。

①中宗時代の神龍2年（706年）に会盟が行われた（佐藤1958, 439）。

・『冊府元龜』巻981外臣部盟誓・開元2年5月「（玄宗）勅（解）琬齋神龍二年吐蕃誓文，與（空）達延定界。注：臣欽若等曰，神龍二年盟誓事史欽」

②唐の宰相ら10名または22名と吐蕃の君臣が誓約した。

・『新唐書』巻216吐蕃伝「吐蕃又遣使者上書言，孝和皇帝（＝中宗）嘗賜盟，是時唐宰相盧欽望……凡二十二人，及吐蕃君臣同誓」

・『冊府元龜』巻981外臣部盟誓「開元六年十一月，吐蕃遣使奉表曰……孝和帝在日，其国界並是逐便断当訖，彼此亦已盟誓。漢宰相等官入誓者……一十人。」

③後の唐の宰相の言からは架橋や築城など国境に関する取り決めをした事が伺える⁽²⁾。

・『新唐書』吐蕃伝「開元二年……宰相建言，吐蕃本以河為境，以公主故，乃橋河築城，置独山，九曲二軍，距積石二百里。今既負約，請毀橋，復守河如約」

唐と吐蕃が会盟に至った経緯については『新唐書』吐蕃伝に「虜南属帳皆叛，賛普自討死于軍。諸子争立，国人立棄隸跼賛為賛普，始七歳，使者来告喪且求盟」と見え、704年に吐蕃王チ＝ドゥーソンが陣没し、新王のチデツクツェン（棄隸跼賛）も幼少であったため吐蕃の方から唐に会盟の締結を請願した事が分かる。

これに対して唐が吐蕃からの会盟締結の要請に応じた国際情勢上の理由は、神龍会盟を締結した同じ年の12月以降唐が相次いで突厥対策（募兵，要塞構築，反突厥勢力との連合等）を行っている事（菅沼2010, 4）より推測して、突厥への兵力集中という軍事上・外交上の目的から唐は吐蕃との会盟を決断したと思われる。神龍会盟前後の西方と北方の情勢及び相関については年表1にまとめた。

神龍会盟の翌年の707年，吐蕃側の要請に応じて中宗の兄の孫娘金城公主がチデツクツェンに降嫁する事が決定し，710年公主が吐蕃に輿入れした。これは文成公主に次ぐ2度目の公主降嫁となるが，712年吐蕃は鄯州都督に賄賂を贈って公主の化粧料として河西九曲を獲得し，同地を前進基地として714年（開元2）8月，臨洮（甘肅省）に入寇を再開したため両国は戦争を再開する。この和睦と戦争の経過を次節で考察したいと思う。

——唐・吐蕃会盟の歴史的背景とその意義——

【年表 1】 神龍会盟前後の唐・吐蕃関係および北方情勢

西暦	吐蕃の動向	突厥の動向・唐の突厥対策
701	吐蕃と突厥が涼州を挟撃	
704	チ=ドゥーソンが陣没し、幼少のチデツクツェンが即位	
706 (神龍 2)	唐・吐蕃間で「神龍会盟」を結ぶ	12 月 突厥が靈州・原州・会州を襲撃。 中宗は突厥可汗默啜の暗殺者に官職授与を約束 【神龍会盟締結後より対突厥政策を実行】
707 (景龍元)	吐蕃が公主の降嫁を請願した為 4 月 金城公主の降嫁が決定	正月 中宗が群臣に突厥平定策の上奏を下命。 対突厥戦に備えて猛士を募兵
708 (景龍 2)		3 月 北辺に突厥防御の為の要塞（三受降城）を構築。唐は、反突厥の突騎施・キルギスと連合して突厥攻撃を計画（～710 年）
710 (景龍 4)	正月 金城公主が吐蕃に降嫁 6 月以降 吐蕃軍が安西都護府を襲撃	【金城公主降嫁後、突厥に兵力集中】 5 月 中宗が突厥討伐令を発布 6 月 中宗が毒殺され、突厥攻撃は中止
712	河西九曲を金城公主の化粧料として吐蕃に割譲	
714 (開元 2)	5 月 吐蕃が国境を河源に定め会盟することを請願 6 月 吐蕃が盟書を献上 8 月 吐蕃軍 10 万が臨洮に入寇、蘭州・渭源を攻撃。 10 月 吐蕃軍が渭源を再攻撃したので唐軍がこれを撃退。吐蕃が敵国の礼の適用を請願するが玄宗は拒絶 12 月 唐は鄯州に隴右節度使を設置(対吐蕃防衛が目的) 【唐・吐蕃の会盟交渉は失敗し両国は戦争再開】	2 月 突厥軍が北庭を襲撃 3 月 北伐令を発布して突厥攻撃を計画 【突厥攻撃に集中する為に吐蕃の会盟に応じる】 7 月 契丹（突厥の属国）が唐軍を撃破

1.3 失敗に終わった開元 2 年（714 年）の会盟締結の為の交渉

唐・吐蕃間の会盟締結の動きは開元 2 年にもあったが、和睦交渉の最中に両者の間で戦闘が再開した為に会盟は中止となった。本節では、開元 2 年の会盟に向けての交渉が失敗に終わった背景等について考える。

『旧唐書』巻 196 吐蕃伝、『新唐書』吐蕃伝、『資治通鑑』巻 211、『冊府元龜』巻 981 外臣部盟誓・開元 2 年などの記載を抜粋すると以下の状況であった。開元 2 年（714 年）5 月、吐蕃の宰相盍達延が、河源を国境となして新たな会盟を結びたいと唐に申し出、玄宗もこれに応じた為、6 月には吐蕃の宰相尚欽蔵と名悉臘が来朝して玄宗に盟書を献上し、唐・吐蕃間は新たな会盟の締結に向かった。しかし和睦への流れに逆行して同年 8 月、盍達延の率いる吐蕃軍 10 餘万が臨洮に入寇し、蘭州・渭源を襲撃した。更に 10 月にも吐蕃軍が再度渭源を襲撃した為、玄宗は激怒して親征を考える程であった。唐軍は渭州西の武街で吐蕃軍を大破したが、唐・吐蕃間の戦争が再開した為に盟約は定まらなかった。このような状況下、吐蕃は渭源攻撃と同月の開元 2 年 10 月、唐に遣使して「敵国の礼（対等の立場）」で遇するよう要請してきたが、玄宗は当然の事ながらこれを拒否した。この後、吐蕃は開元 6 年（718 年）11 月と開元 7 年（719 年）6 月にも遣使して盟書への署名を要請したが、玄宗はこれも拒絶した。

国際情勢上の背景としては、突厥の動向と唐による突厥攻撃作戦が挙げられる。開元 2 年（714 年）2 月、突厥は北庭を襲撃し（『旧唐書』巻 194 突厥伝）、3 月、玄宗は北伐令を発布して大規模な突厥討伐を計画した（『文苑英華』巻 459「令姚崇等北伐制」）⁽³⁾。唐は二正面作戦を回避する為には吐蕃との和平維持が必要であると判断し、吐蕃の要請する新たな会盟に応じたのであろう。また吐蕃も、唐の北方情勢の不穏を察知して強気に出たと思われる。吐蕃が大軍を集結させて臨んだ開元 2 年の会盟要請は、隴右への侵攻を有利に進める為の謀略であったか

も知れない。こうした状況に対する打開策として、唐は開元2年12月、鄯州（甘粛省）に隴右節度使を創設して対吐蕃の為の辺防を強化し、開元6年（718年）と開元7年（719年）に吐蕃の要請する盟書への署名を拒絶して、西方に対する警戒を強めた。

この様に開元2年の唐は突厥と対戦中であった為、吐蕃に対し融和策で臨んだと考えられる。また開元2年から7年にかけての交渉で吐蕃が唐に対して要求した点をまとめると、①新たに会盟する事、②新たに国境を劃定する事、③吐蕃を「敵国の礼」で遇する事の3点であった。②と③は吐蕃の長期的な外交の指針となり、この後、②は開元会盟（730～733年頃）、建中会盟（783年）、長慶会盟（821年）で、③は建中会盟の2年前（781年）に各々実現された。

2 開元会盟と赤嶺碑文：歴史背景と時期

開元18年（730年）より唐と吐蕃は和睦交渉を行い、2度目の会盟となる開元会盟を結んだ。唐・吐蕃は国境を青海東南の赤嶺に劃定し、碑を建て、碑石の上には盟文を刻み、国境と盟約内容を視覚的に明示した。この碑文を本稿では「赤嶺碑文」と呼ぶ。2章と3章では開元会盟と赤嶺碑文を取り上げ考察する。

2.1 開元会盟締結の歴史背景

本節では開元会盟を行った背景と理由について、軍事と国際情勢の観点から論じる事にする。

吐蕃側が会盟を望んだ最大の理由は軍事的敗北であった。開元16年（728年）から開元17年（729年）にかけて唐が河西・隴右で吐蕃軍に連勝し吐蕃側の重要な軍事拠点等を奪取した為、吐蕃は交戦を断念し、開元18年（730年）遣使して唐に和睦を要請した（『旧唐書』『新唐書』吐蕃伝；『資治通鑑』巻213）。以後両国の戦闘は止み、毎年長安とラサの間を使節が往来して和睦交渉を行うようになった。

また唐側が、その軍事的勝利にもかかわらず吐蕃との会盟を受け入れた背景としては、唐を取り巻く国際情勢、特に北方情勢の悪化があったと思われる。実際、吐蕃の宰相名悉臘が長安を訪れ唐・吐蕃が和睦交渉を開始した開元18年10月の直前、同年5月に、唐の支配下にあった契丹が反乱を起こし、突厥の支援のもと唐への抗戦を開始している。開元20年（732年）3月には契丹・突厥連合軍が幽州（河北省）の北山で唐軍と交戦し、9月には渤海が登州（山東省）を襲撃し、開元21年（733年）閏3月、突厥・契丹・渤海3国の連合軍が榆関都山（河北省）で唐軍を撃破した（菅沼2010, 10-11）。

この様に唐は吐蕃と和平交渉を行っていた同じ時期に突厥・契丹・渤海連合と対決しており、北方情勢に専念する為にも西方戦線の終息を期して吐蕃との会盟を図ったと思われる。年表2はこの時期の唐・吐蕃間の戦闘と和睦交渉を北方情勢と照らしつつまとめたものであり、西方と北方に対する唐の外交が密接に関連していた事が見て取れる。開元会盟後の数年間は西方情勢は安定し、その間に唐は北方での戦いに集中でき、その後、北方情勢も沈静化に向かった。

——唐・吐蕃会盟の歴史的背景とその意義——

【年表2】開元会盟前後の唐・吐蕃関係および北方情勢

西暦	吐蕃および西方情勢	突厥・契丹および北方情勢
728 (開元 16)	正月 安西副都護の趙頤貞が吐蕃軍を曲子城で撃破 7月 吐蕃軍が瓜州を襲撃するが張守珪に撃退される 7月 河西節度使蕭崇らが渇波谷（青海西）で吐蕃軍を大破 8月 杜賓客が吐蕃軍を祁連城で撃破	8月 突厥が朝貢 9月 突厥が朝貢
729 (開元 17)	3月 張守珪らが吐蕃の大同軍（沙州西南）を破る 3月 朔方節度使信安王禕が石堡城を吐蕃より奪取 【開元 16～17年、唐は吐蕃に集中攻撃】	
730 (開元 18)	4月 吐蕃が朝貢 10月 名悉臘が来朝し方物を献上して和睦を請願 12月 諾勃蔵が来朝して方物を献上 【唐・吐蕃間の和睦交渉が始まる】	5月 契丹が反乱を起こし、突厥に帰順 【北方情勢が緊迫化し始める】
731 (開元 19)	正月 崔琳が吐蕃に派遣され、その後、吐蕃の論尚它砮を伴って長安に帰還	
732 (開元 20)	正月 尚它砮が李行緯と吐蕃に帰国 7月 論紇野贊が来朝	3月 幽州北山の戦い： 契丹・突厥連合軍 対 唐軍（唐軍勝利） 9月 渤海が登州（山東省）を襲撃
733 (開元 21)	正月 李嵩が吐蕃に赴き金城公主に会う 2月 金城公主が玄宗に赤嶺に境界碑の立石を提案 9月 赤嶺に境界碑を立石。唐の張守珪、李行緯、吐蕃の莽布支が現地で建碑を監督 【赤嶺碑文の立石】	閏3月 都山の戦い： 契丹・渤海・突厥連合軍 対 唐軍 【唐軍が北方連合に大敗】
734 (開元 22)	玄宗が李倕を赤嶺に派遣 吐蕃が王女を突騎施可汗（蘇祿）に嫁がせる	4月 張守珪が契丹軍を撃破 7月 唐は新羅に対して渤海討伐を命令 10月 突厥可汗ビルゲが暗殺される 12月 張守珪が再度契丹軍を撃破、契丹は唐に帰順 【唐が北方連合に対して反撃】
735 (開元 23)	10月 突騎施が安西・北庭を襲撃 楊紹賢が視察の為に赤嶺に派遣される	7月～9月 唐・契丹連合軍が突厥軍を撃破 【北方情勢が沈静化に向かう】
737	吐蕃軍が小勃律を攻撃	
738 (開元 26)	吐蕃軍が河西に入寇。唐は河西・隴右・劍南の三方面より吐蕃に一斉攻撃。攻撃開始前に唐は赤嶺碑文を破壊 【唐・吐蕃間の戦争が再開】	

しかし、唐・吐蕃間の和睦から数年後の開元 26 年（738 年）、唐は河西・隴右・劍南の三方面から吐蕃に対して一斉に攻撃を再開した。唐・吐蕃間の戦争再開の契機になった出来事は、吐蕃と突騎施の婚姻同盟と開元 25 年（737 年）の吐蕃による小勃律攻撃と考えられる。『旧唐書』『新唐書』吐蕃伝、チベット語編年記等の記述よりこの時期の吐蕃の動向を概観すると、吐蕃は開元 22 年に突騎施と通婚し、開元 25 年に小勃律を攻撃している（森安 1984, 36-39; 王 1992, 153）。突騎施は、吐蕃と通婚した翌年の開元 23 年に安西と北庭を襲撃したが、吐蕃と突騎施は過去に 2 度連合して安西都護府を襲撃しており、唐は両者の連繫を西域への脅威と捉え警戒を強めたと思われる（菅沼 2010, 15）。また、小勃律はカシミール西北の小国で「唐の西門」と称されていた。開元会盟により赤嶺の侵犯が禁じられた為、吐蕃はパミール経由での西域侵攻ルートの開拓を図ったと思われるが、同地を奪われると西域が吐蕃軍に脅かされる為、唐は開元 26 年、吐蕃への攻撃を再開したと考えられる。

ここで筆者が注目したのは、唐は吐蕃との休戦期間に契丹を帰順させ突厥を撃破し、開元 23 年（735 年）9 月には北方情勢を沈静化させている点であり、国際情勢の上からも唐には吐蕃との休戦を続ける必要性が薄らいでいた。つまりこの時期の外交を唐側から見ると、開元 18 年

5月以降、北方情勢が不穏であった為、唐は二正面作戦の回避を図って吐蕃と会盟し、唐は契丹を帰順させ、開元23年に突厥を撃破し、北方での戦いを終息させた。その間、開元22年以降、唐が北方情勢に専念している隙に吐蕃が西域への侵攻を企てた為、唐は北の憂いを除いた後、吐蕃との戦いを再開したという構図になる。

2.2 開元会盟の行われた時期

開元会盟の行われた時期については史書に明確な記載がない。ただ関連する史書の記述としては、『冊府元龜』巻981外臣部盟誓に「開元18年(730年)10月、吐蕃使名悉臘等至京。詔御史大夫崔琳、充使報聘」とあり、『冊府元龜』巻979外臣部和親2に「開元18年10月、吐蕃遣其大臣名悉臘来朝、請固和好之約……今故使御史大夫崔琳往申信約」とある。

名悉臘は吐蕃の宰相であり、約20年前の709年、金城公主を迎える為に唐に来朝し、710年に公主をラサに連れ帰り、開元2年(714年)6月には来朝して玄宗に盟書を献上した(『新唐書』吐蕃伝)。この様に名悉臘は親唐の和平派の重鎮であり、開元18年(730年)10月、和睦交渉の為に唐に派遣されたと思われる。また唐側の崔琳は御史大夫であり、開元19年(731年)正月にラサに派遣され、同年9月、吐蕃の論尚它碑を伴って帰国した(『資治通鑑』巻213)。これについては、上記『冊府元龜』外臣部和親2に「崔琳往申信約」とあり、崔琳が盟約の為に吐蕃に派遣された事、『冊府元龜』外臣部盟誓に「充使報聘」とあり、崔琳が前年の名悉臘の来朝に対する答礼として吐蕃に派遣された事の2点が推測される。これらの記事より、名悉臘は開元18年来朝して長安での会盟に参加し、崔琳は開元19年吐蕃に派遣されてラサでの会盟に参加したと推察する論考もあり(劉1989, 56)、筆者もこの論考が妥当であると考ええる。

更に筆者は、開元18年10月の名悉臘の来朝と開元19年正月の崔琳の吐蕃への派遣が『冊府元龜』巻981外臣部の「盟誓」の条に取り上げられている事に注目した。『冊府元龜』外臣部「盟誓」には、唐と吐蕃のその他の会盟(開元2年の会盟交渉、宝応会盟、永泰会盟、大暦会盟、建中会盟、平涼偽盟、長慶会盟)、唐・突厥間で結ばれた2度の会盟、唐とウイグルの会盟、前漢と匈奴の会盟等も収録されており、唐を含めた中国王朝と隣接する国家との会盟や盟約に関する記事が収められている。この事より、名悉臘の来朝と崔琳の吐蕃への派遣は、会盟に関連した記事である可能性が高いと考えられる。

また唐の宰相張九齡の文集『曲江集』巻11に玄宗がチデツクツェンに下した勅書「勅吐蕃贊普書・第3首」が載っており、そこに「与贊普結約、于今五年(贊普と盟約したのは今から5年前)」とある。勅書の発布年代は不明であるが、先行研究は作成年代を開元24年(736年)と考証している(譚1988, 132; 顧2005, 246)。その5年前は開元19年(731年)に当たるので、この結約は開元19年にラサで行われた会盟を指していると考えられる。

以上より、開元18年に吐蕃の名悉臘が来朝して長安で会盟し、開元19年に崔琳が派遣されラサで会盟が行われたとの結論が妥当であろう。

2.3 赤嶺碑文：建碑監督者の北方戦線への転任と建碑年の特定

赤嶺碑の建碑年代については2通りの記述があり、『冊府元龜』巻653奉使部称旨・李嵩、巻979外臣部和親2、『旧唐書』巻112李嵩伝、『資治通鑑』巻213、『唐会要』巻97吐蕃伝では碑

——唐・吐蕃会盟の歴史的背景とその意義——

が建てられたのは開元 21 年（733 年）であるとし、『旧唐書』巻 8 玄宗紀、巻 196 吐蕃伝では建碑年を開元 22 年（734 年）であると記している。赤嶺碑に関する先駆的な研究として、諏訪義讓氏は『旧唐書』吐蕃伝の記述より開元 22 年に建碑とし（諏訪 1956, 112）、佐藤長氏は『冊府元龜』巻 979 外臣部和親 2 に引用された赤嶺碑文に「其碑文曰、維大唐開元二十一年、歲次壬申」と記されている事から、碑は開元 21 年に建てられたと考証した（佐藤 1958, 466）。

尚、上記の『冊府元龜』外臣部和親 2 には「二十一年二月、金城公主上言、請以今年九月一日樹碑于赤嶺、定蕃漢兩界……及樹之日、詔張守珪、李行緯、与吐蕃使莽布支、同觀樹焉」と見え、開元 21 年 2 月、金城公主より玄宗に対し赤嶺への建碑の要請があり、建碑の日、唐からは張守珪と李行緯、吐蕃からは莽布支が派遣されて立石の監督に当たった。

張守珪は開元 16 年（728 年）7 月に瓜州、開元 17 年（729 年）3 月に沙州西南の大同軍において各々吐蕃軍を撃破し（年表 2）、対吐蕃戦の前線指揮官となる鄯州都督、隴右節度使に任命された。張守珪は、対吐蕃戦での経験と実績によって建碑の監督者に選ばれたと思われる。

筆者は、開元 21 年建碑説に対する有力な根拠として、この建碑監督者の張守珪に注目した。張守珪は赤嶺での建碑に立ち会った後、契丹討伐軍の司令官として北方戦線へ異動し、開元 22 年には契丹軍と戦っているのである。『旧唐書』巻 103 張守珪伝、『新唐書』巻 133 張守珪伝によれば、開元 21 年、張守珪は北方の幽州長史、營州都督、河北節度副大使に転任して対契丹戦の指揮官となった。北方に異動後の張守珪は開元 22 年（734 年）4 月と 12 月に契丹軍を撃破し、契丹を帰順させた（菅沼 2010, 12-14）。仮に建碑が開元 22 年であったとすると建碑監督者の張守珪は立ち会えないので、碑はやはり開元 21 年に建てられたと考えるべきである。

また、開元 22 年の記事については、佐藤氏は唐側の赤嶺碑視察の記事であろうと推察したが、開元 22 年に唐側の視察の必要性を裏付ける傍証として筆者は以下の事実注目した。開元 21 年秋、吐蕃軍が河西に入寇した為、唐の王忠嗣はこれを撃退している（『冊府元龜』巻 358 将帥部立功 11、巻 396 将帥部勇敢 3）。つまり、境界碑の立石後も両国の和睦が不安定であった為、開元 22 年、唐は国境の赤嶺に金吾將軍の李佺を派遣し、吐蕃との盟約を再確認させた可能性もある。尚、『冊府元龜』巻 980 外臣部通好には「開元二十三年、命通事舍人楊紹賢往赤嶺以宣慰焉」と見え、開元 23 年にも楊紹賢が赤嶺に派遣されて視察に当たっている。チベット語編年記によれば、唐は、開元 17～25 年の期間、開元 26 年の戦争再開の前年まで、毎年ラサに使者を派遣している（王 1992, 152-153）。この頃、北方では開元 23 年（735 年）の 7 月から 9 月にかけて唐と突厥が契丹の帰属を巡って対戦していた（年表 2；菅沼 2010, 14）。北方に不安材料を抱えていた為、唐は西方での和平維持に腐心したのかも知れない。

西方と北方に対する唐の外交姿勢の連動は、派遣された人材、張守珪と李佺の異動にも見て取れる。唐は、対吐蕃戦で殊勲を上げた張守珪を対契丹戦に投入し、北方戦線での戦果を期待したと考えられる。唐にとって赤嶺碑文の立石は西方戦線の終息を意味したので、張守珪に対しては、西方の前線指揮官としての最後の任務である建碑の監督を任せ、その後、北方への転戦を命じたと思われる。また開元 22 年に赤嶺へ派遣された李佺についても、開元 22 年 12 月、突厥に弔問の為の派遣を命じられ（佐藤 1958, 467）、開元 23 年には突厥でビルゲ可汗碑文の立石に立ち会っている（岑 2004, 439-441）。この様に、唐側では西方と北方のフロンティアで同時期（数ヶ月以内）に共通の人材が登用されている。

3 開元会盟の内容および国境劃定

本章では開元会盟の内容をまとめ、会盟の重要条項である国境の劃定、及び境界碑である赤嶺碑文を取り上げ、それらの歴史的意義について考えてみたい。

3.1 盟約の内容

開元会盟の盟文は『冊府元龜』巻979外臣部和親2・開元21年に記載されている。以下に盟約の要点をまとめる。

- ①唐・吐蕃間の舅甥関係を確認して親善を強調：「舅甥修其旧好，同為一家（舅〔唐〕と甥〔吐蕃〕は旧好を修め同じ一家となる）」
- ②国境侵犯の禁止：「不得兵馬相侵（兵馬で相互に侵犯してはならない）」
- ③吐蕃に対する戒め：「無或……侵擾我河湟，窺視我亭障（吐蕃は唐の河湟に侵攻してはならない，唐の辺塞を窺ってはならない）」「無或……剽掠我牛馬，蹂躪我農穡（吐蕃は唐の牛馬を掠奪してはならない，唐の農耕地を蹂躪してはならない）」
- ④唐の將兵に対する戒め：「我家用不奄襲爾城守，覆墜爾師徒，壅塞爾道路，烟滅爾部落（唐は吐蕃の城塞を襲撃しない，吐蕃の軍隊を攻撃しない，吐蕃の道路を塞がない，吐蕃の部落を焼き滅ぼしたりしない）」

以上の様に盟文には唐・吐蕃間の和睦条項が記されており、この盟約が赤嶺碑文の上に刻まれて国境に建てられた。

尚、会盟の盟文においては、『春秋左氏伝』を典拠とする中国古来の会盟形式に則った表現が用いられており、例えば、『左伝』襄公18年の「有如日（日の神にかけて誓う）」、『左伝』襄公19年の「有如河（河の神よ照覧し罰したまえ）」、『左伝』宣公15年の「我無爾詐，爾無我虞（我は汝を偽らない，汝は我を恐れる事はない）」⁽⁴⁾等がそのままの形で記されている。（『左伝』の訳は（小倉1988-1989）を参照した。）しかし、開元会盟の盟文の締め括りでは、『左伝』成公12年の「有渝此盟」の「盟」を恐らく意識的に「誠」に修正して用い、「有渝其誠，神明殛（その誠に違える事あらば，明神が罰を下すだろう）」としている。これは、対等な会盟とは幾分異なるという唐側のニュアンスを反映したものと推測する。

3.2 国境の劃定と赤嶺碑文の立石

唐は開元21年（733年）国境の赤嶺に碑を立て、国境を明示した。それ以前にも国境に関する取り決めがなされたようであるが、吐蕃の越境行為（黄河への架橋，独山軍・九曲軍の設置等）により実際には国境が遵守されなかった為，唐は目印となる境界碑の立石が必要であると判断したと思われる。尚，盟約を碑に刻んで立てるという方法は唐蕃会盟碑にも継承された。赤嶺が境界線に選ばれた理由としては以下の3点が考えられる。①開元17年（729年），唐軍は石堡城（赤嶺の東20里にあった吐蕃の軍事基地）を奪取しており，軍事的に有利な立場の唐は勝利したところで境界を線引きした（軍事上の理由）。②赤嶺より以東は農耕地帯，以西は遊牧地帯であった（佐藤1978, 141, 265注48）ため自然・地理の上からも赤嶺は両国の境界

——唐・吐蕃会盟の歴史的背景とその意義——

として適切であった（地理上の理由）。③開元 19 年（731 年）、赤嶺が互市の場として許可され（『資治通鑑』巻 213）、両国にとっては交易の接点にもなっていた（経済上の理由）。

3.3 碑文の意味と役割：会盟碑と境界碑

唐と吐蕃は、この後も会盟の際に碑を建てる事があったが、碑文にはモニュメントとしての意味の他に以下の様な機能的な意味もあった。①ある種の碑は盟約を刻んで会盟の内容を明示し、明確な記録を告知する会盟碑としての意味を有した。会盟碑の例として、赤嶺碑文と唐蕃会盟碑が挙げられる。②幾つかの碑は国境地点の目印となる境界碑としての意味を持った。境界碑の例としては赤嶺碑文、それに、建中会盟の開催地であり国境でもあった清水（甘肅省）に建てられた「清水碑石」（4 章で詳述）が挙げられる。

赤嶺碑文は、会盟碑と境界碑の役割を兼備した。唐は開元 26 年（738 年）吐蕃への攻撃を再開したが、その際、玄宗は赤嶺碑文の破壊を命じている。唐にとって赤嶺碑文の破壊には、国境も含めた開元会盟の実質的な破棄を意味したと考えられる。また②について筆者は、徳宗時代、吐蕃の宰相尚結贊が「以定界碑被牽倒，恐二国背盟相侵（境界碑が引き倒されていたので、私は両国が盟約に背いて相互侵犯するのではないかと恐れた）」と述べている事（『旧唐書』吐蕃伝）に注目した。この境界碑がいずれの碑か史料に明記されていないが、当時の吐蕃の勢力圏を考えると清水碑石と推定される。境界碑がなければ国境が不明確となり、国境侵犯の危険性があるとの指摘は、碑文の実際的な役割を意味している。

4 開元会盟と安史の乱後の会盟との類似点と相違点

本章では安史の乱（755～763 年）の前後の会盟を取り上げて比較検討し、乱の前後で唐の吐蕃対策がどの様に変化したかを見る。安史の乱以後の会盟としては、乱の終息より 20 年後の徳宗時代の建中 4 年（783 年）に行われた建中会盟を主として取り上げ、開元会盟との類似点と相違点を箇条書にしてまとめる。建中会盟は、開元会盟と同じ 8 世紀に行われた為に時間的に近く、かつ唐が安史の乱で被った痛手からの回復を模索していた時期の会盟でもある為、唐の外交の変化が明瞭に見て取れる。また、有名な長慶会盟（821 年）についても簡単にふれる事にする。

(1) 類似点

①国境劃定：開元会盟、建中会盟、長慶会盟でいずれも国境を劃定した。

②国境の遵守および国境地点での境界碑の立石：開元会盟、建中会盟、長慶会盟で両国は国境の遵守を誓った。更に開元会盟の時には国境に赤嶺碑文を建てて国境を明示した。また建中会盟の際には、会盟の開催地であった清水と国境地点に各々碑を建てたと思われる。その事は以下の 2 史料から推察できる。

【史料 1】『唐会要』巻 97 吐蕃伝に「建中三年（782 年）九月，崔漢衡與蕃使……約靈州以賀蘭，涇州以彈箏峽西口，隴州以清水，為漢界，皆建碑以誌之」とあり、建中会盟の前年（建中 3 年）の和睦交渉において、唐側の国境地点の全てに碑を建て、そこが国境地点である事を記すことを約している。

【史料2】唐の宰相陸贄の文集『陸宣公奏議』巻10に、徳宗が吐蕃の將軍尚覽鑒に与えた勅書「賜吐蕃將書」が記載されており、そこに「清水碑石」という言葉が見える。この碑石についての詳細は不明であるが、清水は建中4年（783年）正月に行われた建中会盟の開催地であり、建中会盟で定まった国境地点の1つでもあった。この地に建てた碑を唐は清水碑石と称したと思われる。

③碑文への盟約内容の刻石：開元会盟では盟約内容を赤嶺碑文に刻んで建てた。長慶会盟の時に立てられた盟約を刻んだ碑は、唐蕃会盟碑としてラサに現存している（岩尾2009）。

④舅甥関係に擬した友好関係の強調：開元会盟、建中会盟、長慶会盟のいずれにおいても、唐・吐蕃を舅甥関係に擬して、両国の親善の強さを強調した。

この様に国境・友好関係など、ある種普遍的な枠組みについては時代を越えて共通している。

(2) 相違点

①表現の変化：開元会盟は「内外」「遠近」「華夷」など華夷思想を含んだ表現や『春秋左氏伝』の表現が多く、中国古来の会盟の形式に則っている。一方、建中会盟の2年前の建中2年（781年）12月、吐蕃王チソンデツェンが「吐蕃と唐は舅甥の関係にあるのに、なぜ吐蕃を臣下の礼で遇するのか」と上奏した為、徳宗は勅書の表現を書き改めた（『旧唐書』吐蕃伝；『冊府元龜』巻981外臣部盟誓）。また宰相陸贄の文集『陸宣公奏議』巻10に記載の、吐蕃の宰相尚結賛に与えた勅書「賜吐蕃宰相尚結賛書・第3首」においても、徳宗は吐蕃を「大蕃」と呼び、かつ対等に扱っている。尚、長慶会盟では「西は大蕃、東は巨唐」と記され、吐蕃は唐に比肩した対等国として表現されている。

②「敵国の礼（対等の立場）」の承認：玄宗は開元2年（714年）10月、吐蕃に対して敵国の礼を認めなかったが、徳宗は建中会盟の前（建中2年12月）、吐蕃に敵国の礼を認めた（『冊府元龜』巻981外臣部盟誓；金子2001, 147-150）。

③国境地点の複数化・厳密化：開元会盟での国境地点は赤嶺の一箇所であったが、建中会盟で定められた国境地点は7箇所ほどであり、唐側の境界は、涇州では彈箏峽西口（甘肅省）、隴州では清水（甘肅省）、鳳州では同谷（甘肅省）、劍南（四川省）では西山・大渡河であり、吐蕃側の境界は臨洮（甘肅省）、成州（甘肅省）、劍南の西方では大渡水西南の大河であった。尚、建中会盟で定められた国境地点は他の会盟と比較して最多であり、最も厳密に決められている。安史の乱以降、河西・隴右が吐蕃の勢力圏と化した為、唐は長安の防衛も考慮して建中会盟では特に国境線を厳格に定めたと思われる。

④国境線に関する条項：建中会盟では国境に緩衝地帯が設けられ（佐藤1959, 614）、緩衝地帯での耕作・城塞の増設・兵力増強の禁止等が定められた。更に後の長慶会盟では、国境地帯における不審者の扱い方も定められた。この様に年を経るに従って国境に関する条項が加えられて、会盟の内容が進化している。安史の乱後の唐にとっては吐蕃との国境問題、長安の防衛が重要度を増した為、国境地帯で起こる諸問題に対応して実情に即した具体的な条約内容へと変化していったと思われる。

⑤史書の記述の変化：開元会盟に関する記述は年代も史料によって異なり会盟の詳細も不明であるが、建中会盟・長慶会盟についての記述は詳細で概ね一致している。この相違に関しては③④でも見たように、安史の乱後の弱体化した唐にとっては吐蕃との取り決めが死

活問題になった為、軍事上・外交上の重要事項について唐は事細かに記録を残し、吐蕃が盟約を違えた場合、記録をもとに正せるよう史書の正確化と詳述を図ったと思われる。この様に、会盟の相違点としては、安史の乱後の唐の勢力衰微を如実に反映している。

5 唐・吐蕃会盟の後世への影響—澶淵の盟との比較

本章では、唐・吐蕃会盟と澶淵の盟などを比較し、その共通点等を概観したいと思う。

中国王朝と隣接する国家との間で交わされた最も古い外交事例は、前漢と匈奴の外交交渉であろう。前漢の高祖は匈奴の冒頓単于に敗北後、和睦の条件として、毎年絮・繒・酒・食物を匈奴に贈る事、単于と兄弟の誼を結ぶ事、単于に公主を降嫁させる事を約した（『漢書』巻94匈奴伝）。その後、外交の形態は変遷していったが共通する点も多く見られる。ここでは、唐・吐蕃会盟のうち盟約内容が分かっている開元会盟、奉天盟書、建中会盟、長慶会盟を取り上げ、唐と突厥・ウイグルとの外交交渉も加えながら、前漢と匈奴の外交事例、澶淵の盟の条約内容（『続資治通鑑長編』巻58；田村1964, 182；古松2007, 32-35, 40）と比較し、共通する項目を抽出し以下にまとめた。

- ①擬制家族（血縁）関係：前漢の高祖は匈奴の冒頓単于と兄弟の誼を結んだ。唐は突厥と父子関係、ウイグルと兄弟関係を結んだ。北宋と遼は澶淵の盟で兄弟の誼を結んだ。
- ②国境の劃定、国境侵犯の禁止：前漢の宣帝と元帝は、匈奴の呼韓邪単于との間で、長城より南は天子が領有し長城より北は単于が領有する事を約した。唐と吐蕃は【開元会盟】【建中会盟】【長慶会盟】で国境を劃定し、国境の侵犯を禁じた。北宋と遼は、澶淵の盟で、国境を瓦橋関とする事、関南は宋の領有とする事、疆界を守って交侵しない事を定めた。
- ③緩衝地帯の設定：【建中会盟】と澶淵の盟では各々両国の国境に緩衝地帯が設けられた。
- ④国境地帯での城塞の増築等の禁止：【建中会盟】では緩衝地帯での耕作、城塞の増設、兵力の増強を禁じた。澶淵の盟では国境地帯での城塞・河道の新築開拔を禁止した。
- ⑤国境地帯での不審者・降服者・捕虜等に関する規定：前漢の宣帝と元帝は匈奴との間で、長城を不法に越える者があれば通報する事、降服者は受け入れない事を約した。唐は【長慶会盟】において国境地帯での不審者の扱いを決めた。北宋と遼は澶淵の盟で、相互に捕虜を送還する事を約した。
- ⑥国境地帯での交易の許可：前漢の景帝、即位直後の武帝は、国境に関市（官設の貿易場）を開き匈奴に物資を供給した。また唐は、例えば開元15年（727年）突厥に対し国境地帯の西受降城での互市、開元19年（731年）吐蕃に国境赤嶺での互市を各々許可し、大暦8年（773年）ウイグルに互市を許した。北宋は遼に対し国境地帯の榷場において交易する事を許した。
- ⑦歳幣：前漢の高祖は匈奴の冒頓単于に対し、毎年絮・繒・酒・食物を贈る事を約した。唐は至徳2載（757年）ウイグルに対して毎年絹2万匹の下賜を約し、【奉天盟書】では徳宗が毎年絹1万匹を吐蕃に下賜する事を約した。澶淵の盟で北宋は遼に対し、毎年絹20万匹、銀10万両を贈る事を約した。
- ⑧盟約を刻んだ碑文の立石：唐は【開元会盟】【長慶会盟】の際に盟約を刻んだ碑を建てた。

—唐・吐蕃会盟の歴史的背景とその意義—

北宋の仁宗は、開封の天章閣に澶淵の盟の誓言を刻んだ碑を建てた。

これらの共通点に関する推論として、唐は前漢・匈奴間の外交事例を一部反映させつつ、西方の吐蕃及び北方の突厥・ウイグルとの外交関係を築き、それは更に後世に受け継がれて北宋と遼の澶淵の盟のモデルになったという構図が成り立つように思える。

唐の外交と前漢の外交とでは、擬制家族関係・国境や領域の規定・国境地帯での交易・歳幣などの共通点が見られる。但し、国境については、前漢と遊牧の匈奴とが漠然と支配領域を約したのに対して、唐は吐蕃との間で実情に即した形で幾度か国境を劃定し直し、碑を建てて境界を明示し、緩衝地帯を設置するなど、厳密で詳細な取り決めを行っている。

唐の外交と宋代の澶淵の盟との間には、表2で示した様に、多くの点で直接的な対応が見られる。澶淵の盟については、毛利英介氏が遼と後唐の間で結ばれた雲中会盟が原型であると論考した（毛利 2006）が、筆者は本章で例示し考察した様に、吐蕃及び突厥・ウイグルに対する唐の外交政策がモデルとなり、五代・北宋へと継承された可能性も充分にあると考える。

【表2】唐の外交（対吐蕃・突厥・ウイグル）と澶淵の盟との比較

	唐の外交（対吐蕃・突厥・ウイグル）	北宋と遼：澶淵の盟（1004年）
擬制家族関係	突厥と父子関係、ウイグルと兄弟関係	遼と兄弟関係
国境劃定	吐蕃と国境劃定 【開元会盟、建中会盟、長慶会盟】	瓦橋関を国境とし関南は宋の領有とする
国境侵犯の禁止	吐蕃と国境劃定し、国境侵犯を禁止 【開元会盟、建中会盟、長慶会盟】	疆界を守って交侵しない事
緩衝地帯	緩衝地帯を設置【建中会盟】	緩衝地帯を設置
城塞等の新築・増築の禁止	緩衝地帯での耕作、城塞の増設、兵力増強の禁止 【建中会盟】	沿辺の城塞・河道は新築開拔しない事
捕虜・降服者等に関する規定	国境地帯での不審者に関する扱いを決めた 【長慶会盟】	両国の俘虜は相互に送還する事
国境地帯での交易を許可	開元15年（727）突厥に対し国境地帯（西受降城）での互市を許可 開元19年（731）吐蕃に国境赤嶺での互市を許可	国境地帯の榷場での交易を許可
歳幣	757年ウイグルに対して毎年絹2万匹の下賜を約束 【奉天盟書】で吐蕃に対して毎年絹1万匹の下賜を約束	北宋は毎年遼に絹20万匹、銀10万両を贈る事
盟約を碑文に刻んで立石	盟約を刻んだ碑を立石 【開元会盟、長慶会盟（唐蕃会盟碑）】	仁宗が開封の天章閣に盟約を刻んだ碑を立石
史料および先行研究	『旧唐書』『新唐書』吐蕃伝・突厥伝・廻紇（回鶻）伝； 『資治通鑑』；『冊府元龜』981外臣部盟誓等	『統資治通鑑長編』巻58； 田村（1964，182）；古松（2007，32-35，40）

おわりに

最後に各章で考察した点をまとめ本稿を締めくくりたいと思う。本稿では神龍会盟と開元会盟を取り上げ、詳細な論考を行うとともに唐の北方情勢との相関を調べた。そして安史の乱以前から吐蕃が東部ユーラシア世界において重要な役割を果たしていた事、及び西方情勢が北方情勢と連動している事等を明らかにした。そして従来建碑年が不明であった赤嶺碑文の立石年代を北方情勢とも関連付けながら特定した。また唐・吐蕃会盟を安史の乱の前後に分けて比較検討し、乱の前後でどのように変化したかを考察した。更に唐・吐蕃会盟の条項を澶淵の盟と

——唐・吐蕃会盟の歴史的背景とその意義——

も比較し、共通点等を整理することで、唐・吐蕃会盟が後世へも影響を与えている可能性についても考察した。唐・吐蕃会盟は唐にとって重要な位置を占めていたのみならず、北方の情勢等にも大きな影響を及ぼすグローバルなものであり、かつ時間的にも五代・北宋の対外関係のプロトタイプとなるなど中国史やユーラシア史全体の中においても大きく位置づけられ、重要な歴史的意義があったと考えられる。

文献表

- 岩尾 一史, Nathan Hill, 武内 紹人, 星 泉, 今枝 由郎
2009 *Old Tibetan Inscriptions*, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies.
- 王 堯・陳 踐 訳注
1992 『敦煌本吐蕃歴史文書〔増訂本〕』北京, 民族出版社。
- 小倉 芳彦
1988-1989 小倉芳彦訳『春秋左氏伝』全3冊, 岩波書店。
- 金子 修一
2001 『隋唐の国際秩序と東アジア』名著刊行会。
- 顧 建国
2005 『張九齡年譜』北京, 中国社会科学出版社。
- 佐藤 長
1958 『古代チベット史研究』上巻, 京都, 東洋史研究会。
1959 『古代チベット史研究』下巻, 京都, 東洋史研究会。
1978 『チベット歴史地理研究』岩波書店。
- 岑 仲勉
2004 『突厥集史・上冊』北京, 中華書局。
- 菅沼 愛語
2001 「唐玄宗「御製御書」闕特勤碑文考—唐・突厥・吐蕃をめぐる外交関係の推移—」『史窓』第58号, pp. 329-339。
2010 「八世紀前半の唐・突厥・吐蕃を中心とする国際情勢」『史窓』第67号, pp. 1-22。
- 菅沼 愛語・菅沼 秀夫
2009 「七世紀後半の「唐・吐蕃戦争」と東部ユーラシア諸国の自立への動き：新羅の朝鮮半島統一・突厥の復興・契丹の反乱・渤海の建国との関連性」『史窓』第66号, pp. 1-22。
- 諏訪 義譲
1956 「唐蕃分界, 赤嶺碑建設の顛末」『同朋学報』第2号, pp. 101-119。
- 田村 実造
1964 『中国征服王朝の研究』上巻, 京都, 東洋史研究会。
- 譚 立人
1988 「有関唐蕃会盟史实的几个問題」『中国史研究』北京, 1988年第2期。
- 古松 崇志
2007 「契丹・宋間の澶淵体制における国境」『史林』第90巻第1号, pp. 28-61。
- 毛利 英介
2006 「澶淵の盟の歴史的背景—雲中の会盟から澶淵の盟へ—」『史林』第89巻, pp. 413-443。
- 森安 孝夫
1984 「吐蕃の中央アジア進出」『金沢大学文学部論集・史学科篇』第4号, pp. 1-85。
- 劉 小兵
1989 「唐, 蕃和盟関係研究」『雲南社会科学』昆明, 1989年第5期。

——唐・吐蕃会盟の歴史的背景とその意義——

注

- (1) 突厥との会盟は『旧唐書』巻194 突厥伝, 『冊府元龜』巻981 外臣部盟誓・武徳7年8月, 武徳9年8月, ウイグルとの会盟は『旧唐書』巻195 廻紇伝, 『冊府元龜』巻981 外臣部盟誓・広徳3年, 南詔との会盟は『旧唐書』巻197 南詔蛮伝等を参照。
- (2) 開元2年以前の会盟は神龍会盟のみであり, 『新唐書』吐蕃伝の「今既負約, 請毀橋, 復守河如約」は神龍会盟での取り決めに指すものと思われる。
- (3) この北伐軍には, 吐蕃の宰相論欽陵(ロンチンリン)の息子である論弓仁も動員された。弓仁は, 吐蕃王チ=ドゥーソンの肅清を逃れて唐に亡命し, 玄宗に重用されていた。
- (4) 玄宗はこの「我無爾詐, 爾無我虞」を好んで用いた。玄宗が突厥に贈ったキョル・テギン碑文漢文面(開元20年建碑)でも, この言葉を用い(菅沼2001, 338注3), 開元5年7月, 吐蕃の捕虜に対しても玄宗はこの言葉をかけている(『冊府元龜』巻42 帝王部仁慈)。尚, 長慶会盟では「彼無此詐, 此無彼虞」になっており, 形を変えて後世でも唐・吐蕃会盟の言葉として受け継がれている。

謝 辞

本研究では, 会盟の儀礼についてフランス国立科学研究センターの今枝由郎氏より, 会盟の呼称等について神戸市外国語大学の岩尾一史氏より, 有益な助言を頂いた。感謝の意を表したい。